

『第十の詩神』

— 英文学者と美術批評 —

最近、わが国でも、作家の美術批評ということがはやっている。が、こんなことは、西洋では古くからあったことで、フランスでは、すでに十八世紀から始まっている。美術の後進国だといわれる英国でも、後れこそしたが、十九世紀には、ラスキンやペイターのようなすぐれた作家の美術批評家があらわれている。しかも、ラスキンのターナー批評やペイターの『モナ・リザ』批評は、世界に類を見ないすぐれた美術批評だといってよい。

ところで、フランス文学者の美術批評については、すでにフォスカという人の研究があり、わが国でも翻訳されているが、英国のそれについては、それらしきものは何ひとつない。ひとつくらいあってもよいのではないか。こう思い立って書いたのが、本書である。

先年物故した英国の詩人批評家ハーバー・リードは、『第十の詩神』なる書物において、ラスキンやペイターの美術批評が「第十の詩神に献げ物をする」ことを説いてい

る。これはどういう意味だろうか。ギリシア神話では、諸芸術を司るのは九人の詩神（ミューズ）であるというが、英文学者の美術批評が第十の詩神に献げ物をするというのは、これが諸芸術に劣らぬすぐれた芸術であることを意味するのである。本書の表題は、言うまでもなく、これを借りたものである。

美術と文学は、一方は色彩と形態、他方は言葉という、全く別個の表現手段を用いる別種の芸術である。文学者は、形態と色彩による絵の美しさを、そのまま自分の言葉で言い表わすことはできない。できるのは、ただ、その絵の美しさに見合う美しい言葉で、これを表現することだけなのである。言い換えれば、その絵に劣らぬ絶妙なイメージを用いて、美しい詩を歌うことではないのである。

例えば、英国の名随筆家ラムは、ティツィアーノの『パッコスとアリアドネー』の中に、自分の暗い経験を読み込み、自分が詩に歌った『昔の親しい顔々』のイメージを見出そうとする。一方、ペイターは『モナ・リザ』の中に、ヴィクトリア朝末期の唯美思想や終末思想のイメージを捜し求め、リードはモダンアートの中に宇宙時代のイメージを求める。彼らの呼び出すイメージはその対象の

絵とは余り関係がないかもしれないが、彼らのそれを描く文章は、その対象に勝るとも劣らぬ美しい文章をなし、ペイターの場合のように、それ自身美しい詩ともなるのである。

また、批評家が他のすぐれた文学や音楽のイメージを援用して文章を豊かにする場合もある。例えば、ラスキンはターナーの絵を、

『ロメオとジュリエット』や『マクベス』のようなシェイクスピア劇のイメージや、シェリーの抒情詩のイメージを用いて批評する。

ロレンスはセザンヌやエトールリアの美術を批評するのに、ストラヴィンスキーの『春の祭典』や『うぐいすの歌』のイメージを借用するという具合である。

私は、こういう文学者たちのイメージをさぐり、その名文の秘密を明らかにしようとしてめたつもりである。だが、それは果してどの程度成功しているだろうか。顧みて忸怩たるものがある。

（やまかわ こうぞう 文学部教授）

（昭和六十一年四月 あほろん社発行）  
本文二四〇頁 二、五〇〇円